

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3290200157		
法人名	社会福祉法人やすぎ福祉会		
事業所名	ソレイユグループホームあらしまにこやか通り		
所在地	島根県安来市荒島町1734		
自己評価作成日	令和3年6月28日	評価結果市町村受理日	令和3年7月26日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.jp/32/
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	有限会社ケーエヌシー
所在地	松江市黒田町40番地8
訪問調査日	令和 3年 7月12日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

・私たち職員は、現在のご利用者の姿しかわかりませんが、歩んでこられた人生の先輩であることを常に頭に入れ、学ぶ姿勢を忘れず、感謝の気持ちで対応します。今できている事を大切にし、継続し、維持できるように支え合っていく事を目指します。
 ・少しずつ身体状況が変化している事を意識し、緊急時、看取りのケアの統一を目指します。
 ・新型コロナウイルス感染予防の為、収束するまでは外部からの交流は自粛し、施設内で楽しめる企画を考案し、楽しみが持てるように工夫します。
 ・新型コロナウイルス感染予防のため、面会が自由にできませんが、広報誌、動画、手紙、写真、電話などを通じてご利用者の様子がわかるように工夫します。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

管理者と職員は、コロナ禍の中、利用者の安心と安全な暮らしを支援するために、「面会、受診、利用者家族の意向確認、ケアプラン見直しや行事の企画等」をチームケアで実践のサービス提供に努め、理念の実践はスローガン「一笑健明」を職員会議で決定し意識統一し、モチベーションを高めて、日々のケアの気付きも話し合い、利用者主体に目を向けて、拘束は駄目の意識も共有し、人間の尊厳を尊重してケアサービス資質向上に取り組んでいる。看取りは、当法人他事業所の看取り経験管理者の体験談を傾聴し、マニュアルも作成し、関係者の話し合いの場も検討しながら早期からの看取り対応を家族の意向も汲みながら工夫している。防災訓練は、避難警報発出により垂直避難をして、避難訓練を体験している。調理は業者委託ながら食事提供は適時適温で楽しみなものとなっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働いている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	事業所理念を基に、今年度もスローガンを作り、各ユニットに掲示している。家庭的な雰囲気大切に、出来る能力を發揮し、支え合いながら日々穏やかな暮らしを目指している。	今年度のスローガン「いっしょうけんめいー笑健明」を理念の目標として最優先に掲げ、各ユニットに掲示し、理念の意識づけは、職員会議で行ない、管理者と職員はチームケアを共有している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍の中で、自治会自体の集まりも中止になっています。地域との接触は自粛していますが、域版広報誌の配布(6月、12月)は継続しています。	自治会はコロナ禍で集会は中止されているが、事業所広報誌「あおば」を自治会に年2回配布して、地域の一員としてのつながりをコロナ禍でもアピールに努めている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	雑巾を荒島小学校、安来3中と各50枚ずつ寄贈、又交通安全マスコットを100個作成し安全祈願後、交通安全週間に運転手会を通じて配布。荒島地区高齢者等生活支援事業と契約し、車の貸し出しをしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2カ月に1回会議を開催し、グループホームの活動状況報告をしている。委員の方々に発言を頂き、サービス向上を目指す。広報誌の写真が小さいとの指摘があり、拡大し良くなったとの意見を頂いた。	二カ月に一回開催の運営推進会議は、コロナ禍で昨年5月まで書面で行ったが、密にならないように場所替えをできるようにして開催し、積極的な委員の意見はサービス向上に活かしている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進介護の中で行政の方にも報告。又、入退所の報告、介護事故報告、制度上の相談(介護報酬の改定など)している。	市担当者との連携は、運営推進会議や介護認定更新等の機会を活かすと共に、介護に係る報告は、介護事故なのかそうでないかは線引きで判定し、市担当者に介護事故報告を行なう等連絡密に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	月1回身体拘束研修、3か月に1回身体拘束廃止委員会を開催。身近な問題を取り上げ参加者の意見を聞き、ケアをより良くするように努めている。動きを制限する行為はないが言葉で抑制するような言動がまれにある。以前よりは良くなっている。	拘束は駄目の意識づけは、身体拘束研修や身体拘束廃止委員会で共有し、身近な言葉掛けや声掛けには気をつけて職員間で注意しあい向上している。外出願望察知の時には、手作業やお茶に誘う等行ない、玄関の施錠は行われていない。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	毎月の身体拘束研修の中に、虐待も含まれている。研修、ユニット内で見られることなど話し合い、情報を共有しケアに取り組んでいる。言動など互いに注意し合えるようなチームを目指している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在、活用している対象者はいないが今後の想定に向けて準備をしていけるようにしたい。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	コロナ禍の中で、以前のようなご家族が居室など生活空間を見学する事は出来なくなった。事前にご家族に説明し、入所当日は、契約書の受け取り、ご利用者の入所のみ。相談、助言は常に行っている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	ケアプラン作成時には必ずご家族の意見要望を聞くようにしている。又、施設独自のアンケートは毎年1月末頃行い2月集計、それを基に次年度のスローガンや重点目標に取り上げたりしている。	利用者家族の思いや要望は、ケアプラン作成時、運営推進会議そして施設独自のアンケート結果などから取り上げて、運営に反映させている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ユニット会議やカンファレンスを通し、相互に意見交換をする。又コロナ禍での行事の在り方などにも話し合った。	ユニット会議やカンファレンスでは、ケアの気づきや利用者との馴染みの関係に配慮した職員の勤務体制や異動等に意見交換を行なう等又、コロナ禍での行事の工夫も話し、運営に反映させている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	現在職員の人数は足りている。自己都合を優先し年休を取得する職員や、全く取得できない職員、業務時間内に仕事が終了し退勤できる職員、退勤できない職員といるので、まだまだ改善が必要である。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	コロナ禍の中で、外部へ出かける研修はほとんど中止になった。今年度は、ウェブでの研修や、感染予防対策を取りながらの研修参加となっている。施設内研修は実施されスキルアップにつながっている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	外部の同業者との交流は、新型コロナウイルス予防についてどのようにしておられるか電話で確認、同法人内での意見交換などはできた。訪問等の活動は行っていない。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	初期段階で分かり得る情報の収集を行い、話し合いを重ね事前に対応や対策などを検討。利用者の気持ちに耳を傾け出来る限りの対応をしている。不安除去のため窓越し面会を家族に依頼した事もある。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	初期段階で分かり得る情報の収集を行い、話し合いを重ね事前に対応や対策などを検討。家族の不安や、面会が自由にできない事からできるだけ受診時などに細かな情報を伝えるようにしている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	日々の生活の中で、必要としている事は何かを職員全体で情報共有し、今後の生活に役立てるようにしている。特に、排泄面入浴など、プライバシーに配慮した声掛けをしている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	これまでの生活歴を考慮しつつ、手作業や、運動、得意な分野など望まれるであろう暮らしの提供に努めている。重介護の利用者は、職員と一緒に一つの事を行い役割を果たすようにしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	些細な事でも家族に報告し、理解をしてもらいながら利用者、家族、施設と3つの面から互いに協力して解決していく姿勢で取り組んでいる。家族ならではの支援が必要な時には依頼する事もある。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	コロナ禍の中で外出は自粛してきました。窓越し面会や、オンライン面会を行ってきました。外出の頻度は少ないが今年から花見も再開しました。感染予防対策をしながら、ドライブ程度で花見をしました。	コロナ禍で面会や外出は自粛となり、面会は窓越しやオンライン面会で持続し、外出は3密対策から少人数づつのドライブ程度で花見をするなど支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	体操やレク活動は一緒に行っている。テーブルの席次は性格的な事、耳の聞こえの問題など配慮しながら職員が間に入り、会話が成立している。行事の時は2つのユニットが一緒に行うようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所者のその後の様子を聞いたりしている(特養)又、入院し、退所後再入所された方もおられる。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日常生活の中で、利用者の思いや要望を聞き出すようにし、カンファレンス等で話し合ったり、家族に協力を要請する事もある。又ケアプラン作成時には家族の要望を聞き、出来る限りの対応をしている。	利用者各人から聞き出す思いや暮らし方の希望等意向の把握は、カンファレンスを行って対応している。意向が分からない時は家族の協力も得たり、ゆっくりと時間をもって聞き出し、家族要望はケアプラン対応している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	基本情報を基に、職員間で情報を共有しながら周知徹底を行い、利用者の性格、環境などこれまでの生活に添えるようケアを行っている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の健康チェック、申し送り、ケース記録、言動や表情に注視し、職員間で声を掛けながら異常の早期発見に努めている。業務ノートを活用しながらケアの統一をしている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	課題を提起し、都度カンファレンスを行い(その日の勤務者)意見交換により対策の検討、時には家族に連携を取り対応している。問題点や課題を明確にし、介護計画を見直している。	本人のより良い暮らしのために問題点を持ちだしカンファレンスにより対策を検討し、家族との連携もとり対応している。介護計画は、取りやすい水分の方法とかの課題や家族と相談する問題を明確にして見直している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	細かな様子、表情、言動などの変化も記録に残すようにしている。又職員が感じた気づきも記録に残すようにしている。職員間で情報を共有し、次に繋げるように努めている。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	緊急の受診の際、家族の都合と合わない事があり、代理で受診に付き添う、買い物を行う。福祉用具レンタルや訪問診療の受け入れもしている。家族の要望などにも柔軟な対応ができるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	以前は地域に出かけたりできたが、他者との接触を出来るだけ少くしておりドライブ等のみ行っている。散髪のみ地域から来ていただいている。(予防対策を取りながら)施設内でできる行事は縮小し継続。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	家族が希望される医療機関を選んでいただいている。通院、訪問診療で対応している。毎月、生活状況や身体状況を書面にして報告している。受診時には最近の状況を書面化し家族に預ける事もある。	家族等の希望するかかりつけ医の受診は、暮らしぶりを書面報告し事業所との関係を築いている。通院の時は最近の様子を書面化し、家族に持参して貰っている。コロナ禍での通院は寄り道はして貰わないとしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	介護職、看護職とも情報を共有している。看護職に疑問な点、注意事項などアドバイスを受けている。又、主治医との連絡、受診が必要な時も迅速に対応できている。嘱託医とも連携している。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院されても、コロナ禍であり、面会もなかなか難しい。地域連携室や、ソーシャルワーカーさんを通じて情報交換をし、退院、受け入れを行っている。退院サマリーを早めにもらうようお願いしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	家族の意向確認は行っている。看取りの経験はないが、今からのその時までの時間を大切にしたいと考えている。今年度は、同法人の施設長の経験を講演して頂いた。高齢、重症化に伴い家族に対し話し合っていたいと考えている。	看取りの経験はないが、家族とはマニュアルで看取りケア対応方針を共有している。当法人他事業所の看取り経験管理者の体験談も傾聴し、重度化や終末期のあり方について早い段階から備えるチーム支援に取り組んでいる。	利用者の平均年齢は高いので、重度化は目に見えて現れ、終末期の介護や看取りの支援は他職種及び家族等との話し合いは年次計画でテーマを決めてゆとりある時間を大切にして行われることを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	日中、夜間共に急変時の対応マニュアルを作成している。救急救命の研修も消防署職員の指導のもと、年1回開催している。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	年2回の避難訓練(火災:日中想定、夜間想定)の実施。マニュアルも作成している。水害時の垂直訓練の実施も行った。備蓄準備(3日分)それに伴う手順や対策方法を職員が把握している。	日中や深夜の避難訓練はマニュアルを作成し、誘導職員を決めて年2回実施している。避難は居室者名札の取付バッジを裏返し行っている。今年7月に避難警報が出され、垂直避難を体験し、スムーズに対応できた。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	月1回の勉強会を実施し、個々の意識作りと質の向上に取り組んでいる。利用者が不快な思いをされないように、職員間で声を掛けながら、刺激を受け向上していける事を目指している。	人格の尊重や言葉かけの勉強会は月1回行い、意識づけに取り組み研鑽に努めている。プライバシー等を損ねる不快な思いとなる言葉かけのきずきは職員間で云い合える場を作り資質向上に努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	利用者の中には自身で決定する事が困難な方もおられるため、選択肢を簡潔にするなど、答えやすいように工夫したり、ゆっくり返事を待つようにしている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	日々の生活はそんなに変化があるものではなくほぼ決まった流れで過ごして頂いている。その中でも時間のある限りマイペースで過ごされる事も大事にしている。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	朝、起床時の整容、衣服の乱れ、入浴時の保清、衣類の選択と交換、ボタンの掛け違い、爪切、髭剃りなど注意している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	業者委託であるが、朝夕は食事の盛り付けを職員と一緒にしている。無理のない範囲で継続してもらっている。食事の好みもありパン食にしたり変化をつけてもらった。月に1回程度クッキングをしている。	献立は喜びや楽しみをもたらし、盛り付けは、職員と利用者は朝夕一緒に行ない、共に食事をして楽しむ雰囲気づくりに努めている。月一度のクッキングは、利用者の喜びや楽しみなものとなっている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量や、形態は個々の利用者に合わせている。水分は何でも飲める方は問題がないが、トロミの必要な方、ゼリー状であれば比較的水分がすすむ方など家族に協力してもらいながら提供している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の口腔ケアは実施できている。まれに拒否される方もあるが時間を置き利用者の状況を見ながら勧めている。中には声掛けだけでできる利用者、仕上げ歯磨きを行う利用者もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	出来る限りトイレでの排泄を声掛けしている。日々の排泄記録を基に職員間で情報共有している。高齢でもあり、レベルアップはなかなか望めないが、汚染しないうちにトイレ案内ができるように努めている。	オムツやパット類等も使用し、排泄チェック表で時間を決め声掛けをし手を差し伸べ歩行介助を行い、トイレ誘導をしている。排泄時間に合わせたその人のスタイル「食事の前とか」の情報も共有し排泄を支援している。	トイレ排泄自立支援は、見守りによる気づきトイレ誘導や排泄チェック表によるトイレ時間誘導が紙パンツやパット類使用の減少となることを期待したい。
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便表の記録を基に、食事摂取量、水分摂取量、下剤服用状況と排便量を主治医に報告し、個々の利用者に向けた排便コントロールに努めている。又、午前午後とラジオ体操を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	あらかじめ入浴の曜日は決めてあるが、その日の体調や、受診の状況により変更することが多々ある。気分よく、お湯に浸かれるように声かけし、ゆっくり入浴できるようにしている。	入浴は午後2時頃から週2回を基本としている。入浴を拒む人は日にちをずらし、嫌がる人はカンファレンスしながら利用者にあった方法を見つけて、入浴を気分よくゆっくり楽しむ支援に努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	食後の静養は、体調に配慮し勧めている。静養できない人は無理に寝かすのではなくお話ししたりしながら利用者のペースで過ごしてもらおう。又「もう少し」と言う利用者にはゆっくり静養して頂く事もある。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬情報ファイルを活用し、理解している。薬が変更になった時には、体調変化を観察する。次回受診時には主治医に報告するようにしている。眠薬など中止になった利用者もある。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	居室の掃除、食事の盛り付け、洗濯物干し、たたみ、畑に水やり、クッキングでの食材カット、味付け等役割を持っている。個々の生活歴により、得意、不得意はあるが一番の楽しみは食べる事である。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるよう支援している	コロナ禍で希望するところと言うわけにはいかない。受診の際家族と出かけられる時はゆっくりされるよう声掛けをしている。畑に出て草を取ったり苗植えをしたり、テラスに出てトマトを収穫したり外を眺めたり歩く事はある。	コロナ禍では、外出は自粛され、受診で家族と出かける時は、外気を吸って気分転換をしゆっくりされる声掛けをしている。一階では畑の草取りや苗植えを行ない、2階ではテラスのトマトを収穫し又、外を眺めたり、散歩をする等気分を晴らす支援をしている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	お金の管理ができる方はないが、小額持つことで安心される方もおられる。金額は把握している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話で直接話をされる方もあるが、耳が遠く電話で会話ができない方もあり、広報誌を郵送する際、直筆の手紙を添える事がある。名前だけの方もあるし、オンライン面会の支援をする事もある。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	季節を感じられる壁画、大きなカレンダー、トイレや洗面台、居室がわかるように表示を工夫している。懐メロを流したり、相撲観戦や高校野球の観戦を楽しめるようにしている。室温、湿度の管理を行いながら快適に過ごせるようにしている	共用空間は季節感を配慮し、居室等の表示もよくわかり、生活感も音楽を聞き、イベントの観戦も出来るように工夫され、利用者にとって懐かしく感じられるソファもレイアウトされ、空調管理は快適に行われて、居心地よく過ごせる共用空間づくりに努めている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	一人になれるのは居室のみ。フロアで交流したり、手作業をしたりする。気の合う利用者同士もあれば、合わない利用者もあり席次を変更したり配慮する事がある。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	以前作られた作品を飾ったり、家族との写真を貼ったりしている。自宅で使用していたポータブルトイレを持参しておられる方もある。出来るだけ自宅や全施設での間取りを大事にしている。	入所の時は、前室の配置を教えてもらい同じ様な居室の配置に努めている。居室は、昔作った作品、家族写真、寝具や自宅で使用のポータブルトイレを持ち込み、居心地よく安らぎを得る工夫となっている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室はゆったりしている。大きな文字や色で分かりやすくトイレの位置や居室を示し工夫をしている。廊下にはオレンジ色の手すりが設置してあり使いやすい。		